

卒業論文

「FTA になりうるポライトネス・ストラテジーの使用

——目上の人物をほめる場合——」

東京外国語大学南・西アジア課程トルコ語専攻

学籍番号 8502014

藤本奈津子

目次

1.はじめに	3
2.先行研究	3
2-1.ポライトネス理論	3
2-2.「ほめ」に関する先行研究	4
3. 研究設問	7
4.分析方法	7
4-1.分析対象	7
4-2.分類	8
4-2-1.出演者の分類	8
4-2-2.番組の分類	8
4-2-3.分類記号	9
4-3.コーディング	9
4-3-1.定義	9
4-3-2.「ほめ」と「反応」	9
4-3-3.「ほめ」の種類	9
4-3-4.「ほめ」の対象	10
4-3-5.「反応」の種類	12
5.結果	13
5-1.「ほめ」発話数	13
5-2.「ほめ」の種類と対象	14
5-3.「反応」の種類	16
6.考察	17
6-1.「ほめ」の頻度	17
6-2.「ほめ」の対象	17
6-3.特徴的な語句	18
6-4.文末の言いよどみ・中途終了型発話	20
6-5.「反応」	21
7.今後の課題	22
8.参考文献	23

1.はじめに

自然会話の中では、ある発話が本来の機能とは異なるはたらきを持つ場合がある。例えば、「ほめ」が皮肉となったり、悪口を言うことが親しさを示す場合などである。発話者がそれを意図して行なうこともあるが、発話者の意図とは違って聞き手に受け取られることも多い。そして、文化的背景も、そのことに影響を与える。

例えば、日本では「目上の人をほめるのは失礼にあたる」という習慣がある。これは、社会的な力関係において下の者が上の者に「評価を与える」のは、たとえそれがプラスの評価であっても失礼である、と考えるためである。したがって、目上の人をほめると聞き手には「失礼である」と捉えられる可能性がある。これは、ポライトネス理論における「フェイス侵害行為」にあたる。

しかし実際には、目上の相手に向かって持ち物や服装をほめたりすることも、日常生活の中ではあり得る。そして、ほめられた側もそれに不快感を示すことなく応える、という場面も見受けられる。またその一方で、「目上の人をほめるのは失礼なことである」という認識も持ち合わせている。

では、目上の相手をほめようとする場合、日本語母語話者はその発話をどのように行っているのだろうか。「相手をほめたい」という欲求と、「目上の相手をほめてはいけない」という意識のギャップを埋めるために、目下あるいは同等の相手をほめる場合とは、その方法に何らかの違いを持たせるのではないだろうか。そうであればおそらく、「ほめ」の対象の選択や使用する戦略に特徴が現れるであろう。また、「ほめ」が現れる頻度自体も、目上に対して行う時は他の場合より低いと予想される。ほめられた側の反応にも差が見られるかもしれない。

本研究では、日本人母語話者同士の雑談の中で現れる「ほめ」を、ポライトネス理論の観点から話者同士の力関係に注目して分析し、文化的に FTA (フェイス侵害行為 → 先行研究 2-1) になる可能性を持つ発話行為を行う際、どのようにその危険を回避しているのか、またそれをどのように受け入れるのかを明らかにしたい。

2.先行研究

本研究では、「ほめ」をポライトネス理論の観点から分析したい。そのために、まずポライトネス理論の概要を述べ、その後「ほめ」に関する先行研究でどのようなものがあるかを詳述する。

2-1.ポライトネス理論

宇佐美(2001)によると、「ポライトネス」とは「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」すべてを指す。そして、ポライトネス理論の鍵概念となるのが、「フェイス」という概念である。

対人コミュニケーションに関わる基本的欲求として、人間には「ポジティブ・フェイス」(positive face)と「ネガティブ・フェイス」(negative face)の二種類のフェイスがあるとする。「ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、良く思われたい、好かれたい、賞賛されたい、といったプラス方向の基本的

欲求であり、「ネガティブ・フェイス」とは、個人の領分に関して他者に立ち入られたくない、邪魔されたくない、といったマイナス方向の基本的欲求である。

一般に、このフェイスは維持されるべきものであり、人々は互いのフェイス維持に協力し合う。この、人間の基本的欲求である二つのフェイスを脅かさないように配慮することが「ポライトネス」であると捉えられる。そして、それぞれ「ポジティブ・フェイス」に配慮する戦略を「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・フェイス」に配慮する戦略を「ネガティブ・ポライトネス」と呼ぶ。

「円滑な人間関係」とは、これらのフェイスが維持される状態において成立するものである。しかし、ある種の行為は、本質的にそのフェイスを脅かす性格を持つ。例えば、聞き手に何らかの行為を要求する「命令」や「依頼」は相手のネガティブ・フェイスを、また相手への「悪口」や「非難」は相手のポジティブ・フェイスを侵害する言語行為といえる。このように、フェイスを侵害する可能性のある行為は「フェイス侵害行為(Face Threatening Act: FTA)」と呼ばれ、「相手のフェイスを脅かす(FT: Face Threat)度合い」すなわち「フェイス侵害度(FT 度)」が高くなるほど、よりポライトな戦略が必要になると捉えられている。FT 度は以下の公式によって見積もられる。

$$W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

W_x: フェイス侵害度(FT 度)、行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合い

D : 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P : 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

R_x: 特定の文化で、ある行為(x)が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute ranking of imposition)

この公式によって見積もられた「フェイス侵害度」を軽減するために適用するのが「ポライトネス・戦略」だといえる。

2-2.「ほめ」に関する先行研究

「ほめ」の定義を明確にしている論文はあまり多くない。小玉(1996)では、「ほめ」の定義を「ほめるという言語行為は、話し手が聞き手或いは聞き手の家族やそれに類する者に関して“よい”と認める様々なもの或いはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的或いは暗示的に、肯定的な評価を与える行為である」としている。

これに対して、古川(2003)は、目の前にいない人物(＝第三者)に対する「ほめ」も広い意味での「ほめ」と捉え、「「ほめ」とは「ほめ」の対象にほめ手が価値づけをすることにより、「ほめ」の対象や、対象に関わりのある人／物／ことの価値を上げる言語行為である」と定義している。

川口・蒲谷・坂本(1996)では、「ほめ」を、本当にほめたくてほめる「実質ほめ」と、ほめること自体に表現の意図はなく別の表現意図のために行う「形式ほめ」に分け、その相違を考察している。

特に、「実質ほめ」は「自分の感情を相手に伝えること」を目的とした表現行為であるが、「感情伝え」を行えるのは普通、個人的に親しい人に限られるとされる。したがって、初対面・目上の人など親しさを直接的に表現することが不適当な相手には感情を伝えることができず、「実質ほめ」も行え

ない。また、「実質ほめ」は相手の能力や趣味の評価にもつながるので、ほめ手が指導者・監督として評価を行う、あるいは専門家として他者と比較できるような場合に行うのが望ましいとしている。

一方、「形式ほめ」は「相手に好意を持っている」ということを伝えるのが目的の表現行為であるため、「実質ほめ」ほど相手や場を限定しない。

「ほめ」の機能を分析するにあたって、小玉(1996)は対談インタビュー記事をデータとし、参加者の役割(ホスト・ゲスト)を変数とした。その結果、ホストがゲストをほめるケースが圧倒的に多いことが明らかになった。

また、「ほめ」の機能として、会話やトピックの開始・終了、FTA 軽減、参加者間の連帯感の強化、会話への積極的な参加の提示、話題の転換、回避・補償のストラテジー、などを挙げている。

「会話やトピックの開始」とは、「ほめ」を行うことによって会話の開始をスムーズにし、良好な雰囲気を作り出そうとする機能である。「会話やトピックの終了」は、相手の話を肯定的に評価することでトピックを締めくくり、次の話題に移行しようとする機能である。また、相手に様々な質問をするというインタビュー全体の FTA を和らげる機能や、ホストがゲストの「社会的な面子にかかわる欲求を満たす」ことにより、二者間の心的な距離を縮め連帯感を作り出す機能もある。さらに、ホストあるいはゲストが、相手の話を肯定的に評価することで積極的に会話に従事していたことを示したり、話題の更なる展開または転換を促すこともある。「回避のストラテジー」とは、相手の「ほめ」に対する返答として使用された「ほめ」(ほめ返し)を指し、「補償のストラテジー」とは、相手が自己卑下を行った際にそれを訂正して肯定的な評価を与える、つまり相手の「肯定的な面子を守る」ストラテジーであるとしている。

古川(2000、2003)は、「ほめ」を行う側(以下「ほめ手」)と「ほめ」を受ける側(以下「受け手」)の社会的力関係・親疎関係と、「ほめ」の基準、「ほめ」の対象との関わりを述べた。

「ほめ」の基準を「特定の文化圏での一般的な価値観・評価基準(社会的価値観)」「ほめ手の個人的な評価基準・期待度・好み(個人的価値観)」「ほめ手の専門的見地に基づく評価基準(専門的価値観)」の三つに分け、社会的力関係において上の者が下の者をほめる場合はすべての基準が用いられるのに対し、対等の相手または下の者が上の者をほめる時は「個人的価値観」に基づいて行われる場合が多いことを明らかにした。

また、「ほめ」の対象の不適切な選択は受け手にとっての FTA になりうる、という考えから「ほめ」の対象を「容姿」「性格・属性」「能力」「行動・態度」「関係ある人」「服装・装飾」「作品」に分類し、上の者が下の者をほめる場合は「行動・態度」や「作品」を対象にすることが多く、対等の相手では対象はかなり均等に分散しているという結果を得た。さらに、親疎関係と「ほめ」の対象では、疎の関係で「作品」を、親の関係で「行動・態度」を対象に取る場合が多いという違いも現れた。

また、丸山(1996)は、「ほめ」への返答スタイルを、受け入れ・回避・否定に分類し、返答スタイルとほめ手・受け手の性別・上下の関係を述べた。それによると、日本人が「ほめ」を受け入れるのは、ほめ手と受け手が同性である場合が多く、「ほめ」を否定するのは異性によってほめられた場合である。また、ほめ手と受け手の地位(社会的力関係)が対等の場合の方が、互いの地位が異なる場合よりも「ほめ」が頻繁に発生している。

寺尾(1996)は日本語の返答スタイルの特徴として、英語との比較において打消しが多いこと(ただし日本語だけで見ると、打消しより受け入れ型の返答の方が多い)、特徴的な語句の使用や語句の置き換え、複数スタイルの組み合わせ、等を挙げた。

特徴的な語句として「～だけは」「のみ」「結構」「案外」「意外と」「わりと」「一応」「ちょっと」「少し」「少しは」などがあり、これらの語句の使用によって、「ほめ」の内容を受け入れてはいるが受け入れの度合いを和らげていると考えられる。

また、「ほめ」に使用された語句を、他の受け入れやすい語句に置き換えて受け入れる場合もある。例えば、「上手」とほめられたことに対して「好き」または「得意」と言い換えている例があり、これらは自分自身の他の能力と比較しているのであって他者との比較ではないため、さほど傲慢な印象を与えないからとされる。同様の例が他にも幾つか紹介されている。

その他、ほめてくれたことに感謝を示したいという欲求と、自画自賛を避けたい、または避けるべきだという欲求のジレンマを解消するために、複数の返答スタイルが組み合わさって現れるパターンもある。英語では「感謝」の返答が単独で現れることが多いのに対して、日本語では「感謝」が単独で現れることは少なく、「情動的コメント」「確認」「冗談」などとの組み合わせによって使用されるケースが多い。

横田(1985)は、社会的環境と言語活動は密接に関係し、文化的価値・規範は言語活動に影響を与えているということから、既に第一言語を習得した者が外国語を学ぶ際には、音声・形態・統語論レベルでの転移(transfer)だけでなく、母国語と外国語の社会、文化の違いから生じる社会言語学的転移(sociolinguistic transfer)もあると考えた。その中で特に、日本語学習者の「ほめ」への返答において「プラグマティック・トランスファー(言語がどのように使われるかに関する知識の転移)」がどのように見られるかを観察した。

その結果、日本語学習者の「ほめ」への返答スタイルは日本語母語話者より更に否定が多いことが明らかになり、「日本語では、ほめられたら否定するのが丁寧な返答」ということを意識しすぎるあまりに過剰な「直し過ぎ」が起こるのだらうと考察されている。

上記のように、「ほめ」に関しては様々な視点から先行研究がなされている。しかし、「ほめ」がFTA(フェイス侵害行為)になりうる、という観点からポライトネス理論に則って行われた詳しい研究はまだ無いように思える。

そのため、本研究では「ほめ」がFTAになりうる場合について、特にそれを避けるために自然会話ではどのような戦略が用いられているのかを明らかにしたい。

3.研究設問

- ・FTA になりやすいと思われる、社会的力関係が上の者(目上)への「ほめ」は、力関係が同等あるいは下の者への「ほめ」と違いがあるか。
- ・違いがあるとすれば、目上への「ほめ」の特徴とはどのようなものか。
- ・目上の者が目下にはめられた場合、その反応に特徴はあるか。

4.分析方法

3.で挙げた疑問点を明らかにするために、会話データによる「ほめ」を話者同士の力関係に基づいて分類・分析し、各特徴の比較を行う。

4-1.分析対象

本来、自然会話の分析を行うためには、協力者を募って会話の様子を録音、分析するのが最も望ましいと考えられる。しかし、本研究で扱う「ほめ」は、自然会話の中で短時間に何度も現れるような性質のものではなく、データ数を集めるためには従来の会話録音では非常に効率が悪い。また、被験者の一方に「会話相手をほめるように」という指示を出す方法も考えられたが、研究者の意思がデータに反映されるようでは正確な分析は行えないと判断し、テレビ番組を分析対象とした。テレビ番組を分析対象とすることに関して、「話し手に時間や内容の制限があるため、また撮影されていることを意識して話しているため、自然な会話とはいえない」「編集して放送されている可能性もあるので、やはり自然な会話とはいえない」といった問題点もある。しかし、番組の進行のための説明部分やナレーションによる導入・紹介部分をデータから除き、一定数以上の番組を分析対象とすることで、自然会話としての信頼性をある程度得られると判断した。

したがって、2004 年 12 月～2005 年 12 月に放映されたテレビ番組のうち、以下の条件にあてはまる番組を分析対象とした。

条件①司会者(ホスト)がゲストを迎えて対談・インタビューを行うもの

条件②ホスト、ゲスト共に日本語母語話者であるもの

条件①は、多種多様なテレビ番組のうち、比較的 natural 会話に近い形で行われるものを検討した結果、映像の切替やナレーションが比較的少なく、ホストとゲストが一对一、あるいは二対一で話し合う対談・インタビュー番組が最も適していると考えたためである。また条件②に関して、実際に分析対象としたテレビ番組の中でゲストが日本語母語話者でないと思われる回は対象から除外した。

実際に分析対象とした番組は、『今夜は恋人気分』(NHK 総合テレビ、現在放送終了)、『スタジオパークからこんにちは』(NHK 総合テレビ、月～金 13:05～13:59)、『徹子の部屋』(テレビ朝日、月～金 13:20～13:55)、『トップランナー』(NHK 教育テレビ、毎週日曜日 19:00～19:44)、『音遊

人』(テレビ東京、毎週土曜日 22:30～22:54)。それぞれ、30 分から1時間程度の番組である。

4-2.分類

4-2-1.出演者の分類

本研究のテーマに沿うため、分析対象としたテレビ番組の中で出演者の社会的力関係を設定することが必要となる。そこで、社会的力関係を年齢差に置き換え、ホストの年齢を基準にゲストを「目上」「同等」「目下」に分類した。

本来、「目上」や「目下」といった社会的力関係は一概に年齢差と一致するとはいえないが、各々異なる分野で活動している出演者同士の実際的な社会的力関係をはかるのは困難と思われる。その上で、日本社会では一定以上の年齢差があればそれを社会的力関係とみなすことができると考え、ホストの年齢を基準としてゲストを分類した。それぞれの内容は以下の通り。

「目上」…上位司会者より6歳以上年上のゲスト

「同等」…上位司会者との年齢差が上下5歳以内のゲスト

「目下」…上位司会者より6歳以上年下のゲスト

なお、ホストが二人いる場合、番組の構成上中心となっている方を「上位司会者」、他方を「下位司会者」とし、上位司会者の年齢を基準にゲストを分類する。

4-2-2.番組の分類

データとするテレビ番組を、上位司会者とゲストの関係によって、「上下関係番組」「同等関係番組」「下上関係番組」に分ける。それぞれの内容は以下の通り。

「上下関係番組」…上位司会者がゲストにとって目上の場合(例:上位司会者40歳、ゲスト34歳)

「同等関係番組」…上位司会者とゲストが同等の場合(例:上位司会者40歳、ゲスト40歳)

「下上関係番組」…上位司会者がゲストにとって目下の場合(例:上位司会者40歳、ゲスト46歳)

テレビ番組を上記3種類に分類したのは、先行研究から「ほめ」はホストがゲストに向かって行うのが大半であると予想されたためである。つまり、出演者同士の関係のみを見れば「目上」「目下」は相対的なものなので、どの番組にも必ず「目上」と「目下」、あるいは「同等」同士の組み合わせが現れるが、ホストとゲストの関係も考慮に入れると、「ホストが目上の場合」「ホストが目下の場合」を分けてデータ収集を行うのが適切であると考えた。よって、各20番組ずつ録音・文字化し、データとする。なお、文字化の方法は「改定版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」に従う。

4-2-3.分類記号

テレビ番組を録音、文字化する上で、「上位司会者」「下位司会者」「ゲスト」「男性」「女性」を以下のように記号化した。

C(Chief Host)…上位司会者、S(Sub Host)…下位司会者、G(Guest)…ゲスト

M(Male)…男性、F(Female)…女性

(使用例:CF(上位司会者の女性)、GM(ゲストの男性)など)

4-3.コーディング

4-3-1.定義

小玉(1996)、古川(2003)を参考に、本研究における「ほめ」とそれに対する「反応」を以下のように定義する。

「ほめ」…「話者が、聞き手及び聞き手に属するものに対して、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える言語行為」

「反応」…「「ほめ」の受け手が「ほめ」に対して明示的あるいは暗示的に行った言語反応」

4-3-2.「ほめ」と「反応」

3-3-1 の定義をふまえて、「ほめ」と「反応」を以下の記号でコーディングする。

P(Praise)…「ほめ」

R(Response)…「反応」

ただし、データがテレビ番組であるという性質上、司会者が番組進行のために行う解説やゲスト紹介など、談話ではない部分に現れた「ほめ」はコーディング対象としない。具体的には番組全体を以下のように分類し、適切な部分のみをデータとして扱う。

- ①司会者とホストによる会話部分
- ②司会者による視聴者に向けてのゲスト紹介、説明、解説部分
- ③司会者ではないナレーターによるナレーション部分
- ④司会者とゲストの会話以外の各コーナー

データとして扱うのは①のみ。②～④はデータとしない。

4-3-3.「ほめ」の種類

3-3-2-1.に従ってコーディングした「ほめ」を更に、「ほめ」を行う人物(以下「ほめ手」と「ほめ」を受ける人物(以下「受け手」)の関係により、目上が目下をほめた場合、同等の相手をほめた場合、目下が目上をほめた場合の3種類に分類し、コーディングする。

I …「目上が目下をほめた場合」

II …「同等の相手をほめた場合」

III …「目下が目上をほめた場合」

4-3-4.「ほめ」の対象

「ほめ」の対象物が、受け手にとってどのようなものであるかを5種類に分類し、次のようにコーディングする。

i …「外見」 容姿、服装、所持品など、受け手の外見に関わる要素

ii …「能力」 字がきれい、料理がうまいなどの技術的能力及び身体的能力

なお、受け手が作った作品(小説、絵画など)や、受け手による演技・演奏なども「それを作る(行う)能力がある」という意味で、これに含む。

iii …「行動・性格」受け手がとった行動、受け手の態度や性格

iv …「関係ある人」 受け手の家族(ペット含む)、親戚など受け手と密接に関わる人物、動物

v …「その他」 上記4つのどれにも当てはまらないもの

<例>

・ i 「外見」

(GF04 が出演した過去の VTR を見て)

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	CHF01	*	わー、 <u>かわくいい</u> ですねー<{>。	P	I	i	
2	2	SHM03	*	<やー>{>。				
3	3	GF04	*	なんかね、自分じゃないみたいな感じがします。	R			3

・ ii 「能力」

(GM07 の小学生時代の文集を見て)

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	SHM03	*	まあでも <u>きれいな字</u> 、なくんですね…<{>。	P	I	ii	
2	2	GM07	*	<いやー>{>癖のある字ですね。	R			3

・iii「行動・性格」

(GM11 が自分で考えたという手品を披露した後で)

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	CHF04	*	だ、これを自分でこうやって研究して、ま他にもできる人いるかもしれないけど(あーもちろんです)、“どーなってるんだろう”って自分でやってみたってとこが私やっぱりね、すごいと思うの。	P	I	iii	
2	2	GM11	*	そーうですね、まああの、やっぱりこう、その一、教えてもらわないとできないような高度なこともいっぱいあるんですけど(ええ)、なんかこう自分でこう、どんどんどん生み出すというか、そういうのも…。	R			3

・iv「関係ある人」

(GM06 の家族の写真を見て)

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	CHF01	*	あの一、お嬢様すっごく可愛いですよね。	P	I	iv	
2	2	GM06	*	うちのチビでくすか?><{<}	R			3
3	3	CHF01	*	<ええ><{>}				
4	4	GM06	*	そうですか、ああ、ありがとうございます<笑い>。	R			1

・v「その他」

(GF21 の自宅の話で)

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	CHF01	*	こういった作品を生み出す(はい)、舞台にな っている軽井沢のおうちのことをうかがって も(はい)よろしいですか<v>。				
2	2	GF21	*	<はい>。				
3	3	SHM03	*	はい。				
4	4	CHF01	*	[写真を見て]素敵なの、別荘かと<笑い >思いきや、これはもうご自宅なんですよ ねー<v>。	P	III	v	
5	5	GF21	*	<すごい汚いですよね>。	R			3

4-3-5.「反応」の種類

「ほめ」に対する受け手の返答を、その発話形式によって3種類に分類し、次のようにコーディングする。

1…「肯定」「ほめ」に対する肯定的な返答あるいは謝礼(例:「そうなんですよ」「ありがとうございます」など)

2…「否定」「ほめ」に対する否定的な返答(例:「そんなことはないですよ」など)

3…「回避」「ほめ」に対して肯定も否定もせず、「ほめ」の対象に関する補足説明や話題の転換(例:「(所持品をほめられた場合などに)安かったんですよ」「もらい物でして」など)

5.結果

5-1.「ほめ」発話数

「上下関係番組」「同等関係番組」「下上関係番組」をそれぞれ20番組ずつ収集してデータとした。その中で、上位司会者(CH)が「ほめ手」でゲスト(G)が「受け手」となる「ほめ」のみを集計した結果、以下の通りとなった。

I (目上が目下をほめた場合)「ほめ」…37 発話/20 会話(平均 1.85)

II (同等の相手をほめた場合)「ほめ」…25 発話/20 会話(平均 1.25)

III (目下が目上をほめた場合)「ほめ」…18 発話/20 会話(平均 0.90)

文字化の方法は「改定版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」に従った。ただし、BTSJ では発話文の途中で相手の発話が入った場合には1発話文が複数ラインにわたって記され、各ラインに通し番号がふられて1発話文であることが示される。これに対し本研究では、「ほめ」の発話文の途中で相手の発話が入った場合、終了していないその発話も1「ほめ」発話として数えた。

<例>GM13 の結婚相手に関する話題

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1-1	CHF04		でもまああの彼女は非常にですねえ(ええ)、あのまあ明るい,,	P	I	iv	
2	2	GM13	*	はい。	R			1
3	1-2	CHF04		健康そのもの(ええ)、それからあの非常に取材が綿密(んー)、あの一よく笑う,,	P	I	iv	
4	3	GM13	*	はい。	R			1
5	1-3	CHF04	*	利発、よく食べる。	P	I	iv	
6	4	GM13	*	はい。	R			1

なお、「ほめ手」が上位司会者、「受け手」がゲストの「ほめ」に限定して集計したのは、番組の分類を上位司会者とゲストの関係によって行ったため、会話内に現れる「ほめ」も上位司会者・ゲスト間のものに限定するのが妥当と考えたためである。つまりこのデータは、「上位司会者から目下の相手であるゲストに対して行われた「ほめ」」、「上位司会者から同等の相手であるゲストに対して行われた「ほめ」」、「上位司会者から目上の相手であるゲストに対して行われた「ほめ」」の数をそれぞれ集計したものである。

実際には、番組内でゲストから上位司会者へ、あるいは下位司会者からゲストへ向けて「ほめ」が行われることもあった。それらは番組の分類と一致しないため、ここではデータとしなかったが、各「ほめ」の特徴を考察する際に別データとして扱うこととする。

5-2.「ほめ」の種類と対象

会話内に現れた「ほめ」の種類と対象について、以下のような結果が得られた。

表1:「ほめ」の種類と対象の数

	i「外見」	ii「能力」	iii「行動・性格」	iv「関係ある人」	v「その他」	合計
I「目上が目下をほめた場合」	17(39.5%)	11(25.6%)	6(14.0%)	7(16.3%)	2(4.7%)	43(100%)
II「同等の相手をほめた場合」	13(39.4%)	16(48.5%)	3(9.1%)	0(0%)	1(3.0%)	33(100%)
III「目下が目上をほめた場合」	6(22.2%)	10(37.0%)	7(25.9%)	1(3.7%)	3(11.1%)	27(100%)
合計	36	37	16	8	6	103

表中の()内の数字は、「ほめ」の種類別における対象の割合を示す(小数点以下2桁を四捨五入)。

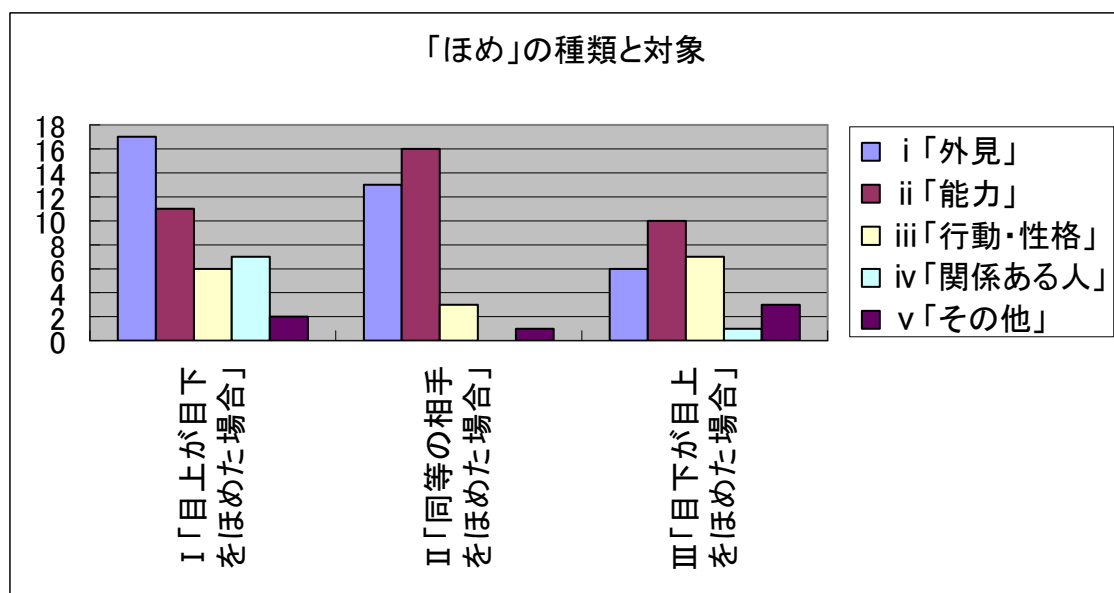


図1:「ほめ」の種類と対象

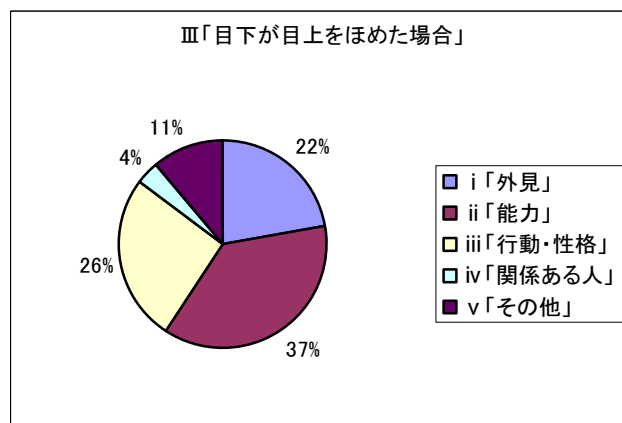
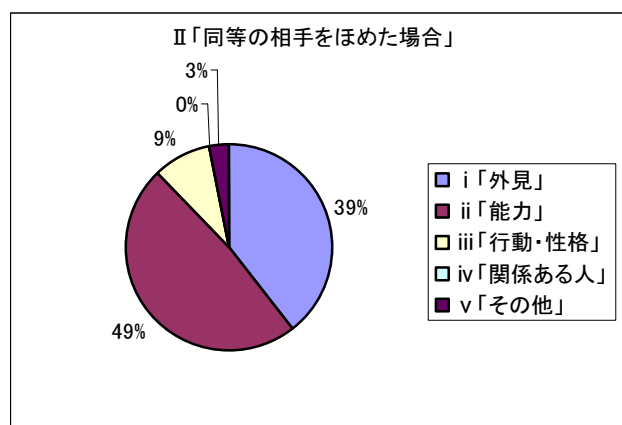
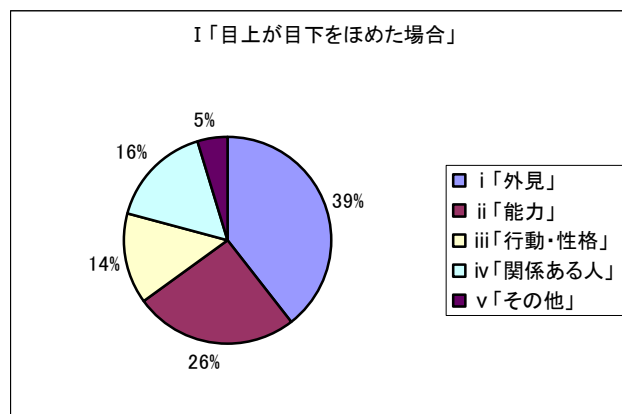


図2:「ほめ」の種類と対象別の割合

5-3.「反応」の種類

会話内に現れた「ほめ」に対する「反応」の種類について、以下のような結果が得られた。

表2:「反応」の種類

	1「肯定」	2「否定」	3「回避」	合計
目上にほめられた場合	18(35.3%)	13(25.5%)	20(39.2%)	51(100%)
同等の相手にほめられた場合	6(19.4%)	10(32.3%)	15(48.4%)	31(100%)
目下にほめられた場合	9(32.1%)	5(17.9%)	14(50.0%)	28(100%)
合計	33	28	49	110

表中の()内の数字は、各「ほめ」における「反応」の種類の割合を示す(小数点以下2桁を四捨五入)。

各「ほめ」数とそれに対する「反応」数が一致しないが、これは「ほめ」1発話に対して「反応」複数発話となることがあるためである。

〈例〉GF01 の子供時代の写真を見ての会話

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	SHM01	*	さらに、こちらの写真(はい)、小学校六年生です。				
2	2	GF01	*	はい。				
3	3	SHM01	*	小学生とは思えない、この、<色香>(く)。	P	Ⅱ	i	
4	4	CHF01	*	<色っぱ>(い)さ。	P	Ⅱ	i	
5	5	GF01	*	<笑いながら>そうですか？。	R			3
6	6	GF01	*	いやいや。	R			2
7	7	GF01	*	お化粧してますかね、一応あの、舞台に立つというんで。	R			3

6. 考察

6-1. 「ほめ」の頻度

4-1.の結果から、1会話に現れる「ほめ」の平均回数は、「目上が目下をほめる場合」>「同等の相手をほめる場合」>「目下が目上をほめる場合」、の順に高くなることが明らかになった。これは、1.で述べた通り、日本語母語話者にとって目上の人物をほめることは難しいのだということの証明にもなるだろう。

ただし、本研究ではテレビの対談インタビュー番組をデータとしたので、厳密な意味での自然会話研究ではない。テレビ番組あるいはインタビューに固有な会話の特徴がデータに反映されると予想される。「ほめ」の頻度に関していえば、全体的に頻度は自然会話より高めになっているだろう。なぜならば、不特定多数の第三者に見られることを意識した上での会話なので、ホスト側には会話をできるだけ和やかな雰囲気で行いたいという欲求があり、またその義務がある。それをゲストも了解しているので、たとえホストがゲストにとって目下の相手であっても、「ほめ」を行われても不愉快さを示すことはほぼ無いといえるだろう。こうした両者の了解の下で行われる会話では、他者に見られることを前提としない自然会話よりも「ほめ」が現れやすくなっていると考えられる。また、同様にインタビューという会話形式でも、ホストが良好な雰囲気作りを進めようとし、ゲストがそれに協力する姿勢を見せるということは小玉(1996)でも指摘されている。この点からも、本研究のデータでは「ほめ」の頻度が普通の自然会話よりも高めであると思われる。

しかし、このことは上記の結論を否定するものではない。むしろ、「ほめ」が現れやすいテレビのインタビュー番組においてさえ「目下が目上をほめる場合」の「ほめ」は、他の「ほめ」より出現頻度が低いので、日常における自然会話では更にその傾向がはっきりと現れるだろうと考えられる。

6-2. 「ほめ」の対象

「ほめ」の対象に何を選択するかも、「ほめ」を行う際の重要なポイントとなる。目上の人物をほめる場合には、その対象に選択されやすいもの・されにくいものが特徴として現れるのではないかという予想のもとに 4-2.の集計を行った。その結果、Ⅲ「目下が目上をほめる場合」およびⅡ「同等の相手をほめる場合」には、「ほめ」の対象に「能力」が選ばれやすいことがわかった。Ⅰ「目上が目下をほめた場合」では i「外見」が最も多く、次いで ii「能力」であった。

対象の分類は i「外見」ii「能力」iii「行動・性格」iv「関係ある人」v「その他」であった。このうち、iv「関係ある人」は「ほめ」の対象ではあるが直接本人に関する「ほめ」ではなく、話題になる頻度も低いことが予め予想できた。本人に関する i から iii の対象のうちでは、ii「能力」やiii「行動・性格」は、「受け手」の人格に基づく最もデリケートな「ほめ」対象といえ、目上の人物への「ほめ」の対象には選ばれにくいのではないかと思われた。古川(2003)でも、行動・態度や作品をほめるのは目上が目下の者をほめる場合に多いと述べられている。相手の内面に関わる「ほめ」を行うのは、相手のネガティブ・フェイスを侵害する危険度が最も高いからといえよう。

では、本研究におけるこの結果をどう捉えるか。

このような結果が出た主な理由は、データがインタビューであったことだろう。様々な分野の人物

を招いてのインタビュー番組であるため、会話の内容はゲストの活動分野に関することになる。俳優や芸術家がゲストの場合には、自ずと会話内容がゲストの演技や作品に関することになり、ii「能力」に対する「ほめ」が現れやすくなっていたのだと考えられる。

会話の場面設定(インタビュー、対談、雑談等)によっても、「ほめ」の対象の選択に違いが出るのではないかという新しい研究課題ができた。

6-3.特徴的な語句

対象の選択と共に、語句の選択も重要な戦略となりうる。いわゆるほめ言葉を使用しての「ほめ」はもちろん、発話中にほめ言葉が含まれていなくても発話文全体の意図として「ほめ」が成立している場合もある。このように様々な形式の「ほめ」の中で、特にその使用が目立ったのが「すごい」という語句であった。

「すごい」の辞書的な意味は、「①恐ろしくて、ぞっとするような感じだ②普通では考えられないような事を見聞きしたり、予想外の事に接したりして感心したりあきれたりする気持ちだ」(『新明解国語辞典第六版』三省堂)とある。これが転じて、「素晴らしい」「とても良い」等の意味でほめ言葉として用いられていることが多い。

〈例〉GM10 が自作の小説を仕事仲間に読ませていたという話題で

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	GM10	*	で、あの一、また、周りにいる人間も当然暇 なんで、そいつらにあの読ませてたんです よ。				
2	2	GM10	*	で読ませるとやっぱり皆“面白い”って言 うんですね。				
3	3	SHF03	*	すごいじゃないですか。	P	III	iii	
4	4	GM10	*	あの七人しかいない所なんで(はい)、そのう ちの一人が“書いたんだこれ”って言って出 して、で“つまんないです”って言える度胸 のある人間はやっぱりないと思うんです よ。	R			3
5	5	CHM02	*	〈笑い〉。				

文字化したデータから、「すごい」がほめ言葉として用いられている発話を、「ほめ手」が下位司会者またはゲストの場合も含めて集計した。ただし、他の形容詞等に対する副詞としての「すごく」または「すごい」は含まない(例:「すごく上手」「すごい素敵」など)。

表3:「すごい」という語句の使用率

	I「目下が目上をほめた場合」	II「同等の相手をほめた場合」	III「目下が目上をほめた場合」
「すごい」という語句の使用率	13.6% (6/44 発話)	21.9% (7/32 発話)	25.9% (7/27 発話)

III「目下が目上をほめた場合」に、「すごい」の使用率はI、IIに比べてやや高いという結果が得られた。

「すごい」がほめ言葉として、特に目下の者が目上をほめる場合に多用される理由は、その意味の曖昧さにあるのではないと思われる。前述の通り、「すごい」の辞書的な意味は必ずしもほめ言葉になるとは限らないが、現在の日本語、特に自然会話においては、ほめ言葉として使用される場合が圧倒的に多い。しかしこれは具体的な良さを述べるのではなく、「自分がそのことに感動、感心していることを示す」マーカーとして使用されている。つまり、言葉としての具体的な意味をあまり持っていない語と捉えられており、そのために目上の相手へのほめ言葉として多用されやすいのではないだろうか。具体的に「よい」「美しい」「上手だ」等のほめ言葉を与えるのは、明確な「ほめ」であり、ほめ手の評価意思がはっきり受け手に伝わる。それに対して、「すごい」はほめ手が感心していることを伝えて間接的に「ほめ」を行う。間接的に「ほめ」を行うことで、目上の相手への「ほめ」がネガティブ・フェイスに対するFTAになる可能性を軽減させようとしているのだろう。

6-4.文末の言いよどみ・中途終了型発話

その他、Ⅲ「目下が目上をほめた場合」の特徴的な戦略として、文末の言いよどみと中途終了型発話が他の二つの「ほめ」に比べて多く見られた。

言いよどみとは、音声的に言いよんだように聞こえた部分で、文字化資料中では「…」で表される。資料中では文中、文末に限らず「…」で表記されるが、特に文末のものに限って「ほめ」発話の特徴的な戦略と捉えた。文中の言いよどみは、何らかの戦略として使用されたのか本当に言葉につまったものかを判断しにくいと考えたためである。それに対して文末の言いよどみは、次の発話に何らかの影響を与えうる戦略であると考えられる。

〈例〉GF09 が子供の頃、父親に反対されてもスキー学校に行きたくて、祖母や伯母からカンパを募ったという話題で

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
1	1	CHF01	*	でもあの、ちゃんとカンパを考えつくって うところもなかなか知恵が(く笑い)、ねえ回 って…。	P	Ⅲ	ii	
2	2	GF09	*	そうですねえ(ねえ)。	R			1
3	3	GF09	*	それしか方法がなかったんでしょね。	R			3

表4:文末の言いよどみの使用率

	I「目下が目上をほめた場合」	Ⅱ「同等の相手をほめた場合」	Ⅲ「目下が目上をほめた場合」
文末の言いよどみの 使用率	6.8% (3/44 発話)	12.5% (4/32 発話)	14.8% (4/27 発話)

文末の言いよどみを、「ほめ手」が下位司会者あるいはゲストの場合も含めて集計した結果、Ⅲ「目下が目上をほめた場合」ではⅠ、Ⅱに比べてその使用率はやや高めであった。その理由として考えられるのは、文末を言いよどむことで発話の断定を避け、相手が自分の発話に介入する余地を示して FTA 軽減の戦略としているのだろう。つまり、目上の相手をほめること自体が FTA となる可能性をもっているため、断定を避けることで発話の FT 度を低くしているのだと考えられる。

同様に、中途終了型発話の多用も、断定を避けて発話の FT 度を下げる戦略だといえる。中途終了型発話とは、「述部が省略されているもの、あるいは言い切られない」発話(宇佐美 2003)である。

〈例〉GF22 が早くに結婚したという話題で

ライン 番号	発話文 番号	話者	発話文 終了	発話内容	ほめ(P) 反応(R)	ほめの 種類	ほめの 対象	反応の 種類
7	7	GF22	*	普段なんにも言わない父なんですよ(ええー)、それがそれ言われた時、“わかった、絶対に成功させる”って逆にね(んー)、そういうふうに思えたし、父の言葉はありがた、がたかったですねとつても。				
8	8	CHF01	*	は一。				
9	9	CHF01	*	もうほんとにもう、なんか絵に描いたような綺麗なカップルで、あの一お写真が(ええー)ねえ、〈ありましたけど〉〈〉。	P	Ⅲ	i	
10	10	GF22	*	〈ほんとと子供〉〈〉だったくんで〈〉。	R			3
11	11	CHF01	*	〈はい〉〈〉。				

表5: 中途終了型発話の使用率

	I「目下が目上をほめた場合」	II「同等の相手をほめた場合」	III「目下が目上をほめた場合」
中途終了型発話の使用率	6.8% (3/44 発話)	9.4% (3/32 発話)	22.2% (6/27 発話)

「ほめ」発話中の中途終了型発話の使用率は、Ⅲ「目下が目上をほめた場合」で 22.2%と目立って高かった。

文末の言いよどみと中途終了型発話という二つの断定を避ける発話形式が、目上をほめる場合に多用されていることから、これらが FTA になる可能性を持つ目上の者への「ほめ」を行う際の、FT 度軽減の有効な戦略であるといえよう。

6-5. 「反応」

「ほめ」に対する「反応」の特徴として、全体的に「回避」が多い。「目下の相手にほめられた場合」にも「回避」の返答が多めに現れている。ただしこれは、寺尾(1996)でも指摘されている通り、1「ほめ」発話に対して複数の「反応」を組み合わせる場合があり、本研究では「反応」を「肯定」「否定」「回避」の3つに分類したため、他の「反応」スタイルと組み合わせられる可能性があるのが「回避」だけだったためもある。つまり、「肯定」と「否定」の組み合わせというのが普通はありえないため、「肯定」と「回避」または「否定」と「回避」の組み合わせが多くなり、結果的に「回避」が最も多く見られたのだろう。

ほめ手が下位司会者またはゲストの場合の「ほめ」に対する「反応」も含めて見ると、「目下の相手

にほめられた場合」には「否定」がやや少ない。これは、目上の相手をほめるのは FTA になる可能性が高いということを受け手も了解しており、ほめ手の FTA 回避の負担を軽減するために受け手も協力的な姿勢を見せているととれる。すなわち、受け手が「否定」の反応をするとほめ手は自分が行った「ほめ」が FTA になってしまったかと考える。その場合ほめ手は、受け手のフェイスを傷つけた分を回復させなければならないと考えて次の発話を展開させるが、受け手が目上である場合、ほめ手は先ほどの FT 度を大きく見積もらざるをえない。そうすると今度は、ほめ手側が FTA 補償のための負荷を感じる。つまり、「目上の相手に失礼なこと(この場合は「ほめ」)をしてしまったので、なんとかそれを補わなくてはならない」という会話上のプレッシャーを感じることになる。そうしないために、目上である受け手も、目下の「ほめ」を受け入れることで会話が良好な雰囲気で続くように協力しているのではないだろうか。

7. 今後の課題

本研究では、テレビの対談インタビュー番組をデータに、話者同士の社会的力関係が「ほめ」にどのような影響を与えているかを調査した。その結果、目下の者が、目上の相手をほめる場合には、「ほめ」発生の頻度自体が低く、語句の使用、文末の言いよどみと中途終了型発話の多用などに特徴があることが明らかになった。また、「ほめ」に対する「反応」も、目下にほめられた場合には「否定」が少ない等の特徴が見られた。こうした特徴が、「目上の人をほめるのは失礼にあたる」という意識と「相手をほめたい」という欲求のバランスをとって、日本人が目上の人物をほめる際のポライトネス・ストラテジーとして作用しているのだといえる。

研究上の反省点としては、データがテレビ番組であったことがあげられる。20 番組ずつ計 60 番組分をデータとしたので、ある程度は自然会話としての信頼性を保てたとはいえ、やはりテレビ番組であること、インタビューであることの特徴が多く出てしまった。また、目下が目上をほめる場合は「ほめ」発生頻度が低いため、データにできる「ほめ」発話数が少なかったことも反省点である。Ⅰ「目上が目下をほめた場合」およびⅡ「同等の相手をほめた場合」に比べて、Ⅲ「目下が目上をほめた場合」の「ほめ」発話数が少なかったため、わずかな発話数の差がグラフ上では大きな差として現れてしまった。十分な数の「ほめ」発話を集めるためには、収集する番組数自体をもっと多く設定しておくべきであった。

「ほめ」対象の選択に会話の場面設定が影響するのではないかという、新しい問題も見つかったので、これも今後の研究課題としたい。

8.参考文献

- ・ 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」『第 7 回国立国語研究所国際シンポジウム第 4 専門部会 談話のポライトネス』9-58 国立国語研究所
- ・ 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開 4 B&L のポライトネス理論(2)ー「フェイス」という概念と「フェイス侵害度見積もりの公式」ー」『月刊言語』vol.31(4)96-101
- ・ 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版:基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2)研究成果報告書
<http://ulipc01.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/index.htm>
- ・ 川口義一・蒲谷宏・坂本恵(1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』vol.15(5)4-12
- ・ 小玉安恵(1996)「対談インタビューにおけるほめの機能ー会話者の役割とほめの談話における位置という観点から」(1)(2)『日本語学』vol.15(5)(6) 59-67 84-92
- ・ 田辺洋二(1996)「ほめことばの日英比較」『日本語学』vol.15(5)33-42
- ・ 寺尾留美(1996)「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』vol.15(5)81-88
- ・ 野本菊雄(1996)「ほめるという言語行動」『日本語学』vol.15(5)4-12
- ・ 古川由理子(2000)「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』第 10 号 117-130 大阪外国語大学日本語講座
- ・ 古川由理子(2002)「「ほめ」の種類ー受け手に直接関係しない「ほめ」を中心にー」『日本語・日本文化研究』第 12 号 41-54 大阪外国語大学日本語講座
- ・ 古川由理子(2003)「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴ー対人関係から見た「ほめ」の分析ー」『日本語教育』第 117 号 33-42
- ・ 丸山明代(1996)「男と女とほめー大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析」『日本語学』vol.15(5)68-80
- ・ 横田淳子(1985)「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』第 58 号 203-217